
❖ 講演会・研究セミナー ❖

日緬パネル展スペシャルトーク

ミャンマー支援活動への思い

2021 年 10 月 26 日(火) 12:40～13:20

龍谷大学深草学舎和顔館 1 階アクティビティホール/オンライン開催 (Zoom)



イベントの様子

❖ 概 要 ❖

2021 年 10 月 26 日（火）に開催された日緬パネル展スペシャルトークでは、ミャンマーへの草の根支援を行う団体の代表の方々をお招きし、それぞれの団体の活動内容を紹介していただいた。

講演者：松本 敏秀 氏（アジアのこどものデンタルケア/福岡・ミャンマーともだちの会）



松本 氏

一人目のゲストスピーカーの松本敏秀氏は支援団体「アジアのこどものデンタルケア」の代表を務め、1 年のうち約半年間はミャンマーに滞在し支援活動を行っている。松本氏とミャンマーとの出会いは氏が九州大学に勤務していた時に遡る。1988 年当時のミャンマーでは軍による学生の民主化運動への弾圧が行われており、その最中、九州大学にミャンマー人歯科医師を留学生として招聘しようと尽力したことがミャンマーに携わるきっかけだったという。

2011 年からは「アジアのこどものデンタルケア」を発足し、本格的にミャンマー支援活動に取り組みはじめた。氏はミャンマー各地を繰り返し巡回訪問し、孤児や少数民族、内線被災者など医療環境に恵まれない人々に対し、歯科医師という自身のバックグラウンドを活かして保健衛生指導や栄養指導を行っている。ミャンマーの事はミャンマー人の手で

解決するのが理想的だという信条から、潤沢な資金や高度な専門知識がなくても継続可能な予防活動に重点を置いている。また、いずれはそれが自立した活動・習慣となるよう、現地の大学で講義を担当したり、歯科医師と共に治療を行ったり、教師や NGO スタッフなどへの研修会を開催したりもしてきた。新型コロナウイルス蔓延によりミャンマーへの渡航が困難になって以降は、オンラインでセミナー等を開催している。

さらに松本氏は「福岡・ミャンマーともだちの会」においても中心的会員として活動している。「福岡・ミャンマーともだちの会」は日本在留ミャンマー人と地域住民との文化交流の促進や生活上の様々な困難を克服する手助けをする非政治・非営利団体である。同会は博多どんたく祭りで民族衣装を着てパレードを行ったり、料理教室などを開催したりという文化的活動を行っていたが、2021 年 2 月のクーデターを受け、ミャンマーを支援したいという気持ちから福岡で写真展「ミャンマーからの声」を開催した。龍谷大学事務局長の三好慶祐氏がこの写真展を訪れたことから、龍谷大学における展覧会の開催という構想につながり、今回の日緬パネル展「文化交流と人道支援—プラットフォームとしてのエンゲージド・ブディズム—」が開催されることになった。

講 演 者：小武 正教 氏（メラウーキャンプ教育支援の会）



小武 氏

二人目のゲストスピーカーの小武正教氏は浄土真宗僧侶であり、「メラウーキャンプ教育支援の会」の代表として活動している。タイとミャンマーの国境地域にあるメラウー難民

キャンプでは、1988 年の民主化運動で蜂起した学生たちとその家族が生活している。会の支援対象は、この地域で小学校から高校までの教育課程を提供しているヤウンニーウ学校である。

小武氏のミャンマー支援のきっかけは 2007 年のサフラン革命の際に全ビルマ生年僧侶連盟から支持の要請を受け取ったこと、また翌年、日本に政治難民としてやってきた民主化活動家のココラット氏に出会ったことだという。ココラット氏の紹介でメラウー難民キャンプの教育支援を依頼され、2008 年 4 月に「メラウーキャンプ教育支援の会」が結成された。現在では同会は小武氏とほか数名の代表を中心にサポート会員 30 名程度の規模の団体となっている。また、立命館大学の学生団体「PASTEL」とも連携して活動している。

「メラウーキャンプ教育支援の会」では、2008 年の発足以来、メンバーが毎年難民キャンプを訪れ、メラウーキャンプの学校の金銭的支援に加え、教育ワークショップや日本文化の紹介などを行っている。また、難民キャンプの紹介動画を制作し日本で上映会をすることで現地の様子を伝えたりするなどの活動を行っている。

今回のトークイベントでは 2014 年に制作された動画を上映しながら、支援で整えられた学習環境と共にヤウンニーウ学校の教師や学生の声などが紹介された。ヤウンニーウ学校はレベルの高い教育水準が評判を呼び、カレン族、ビルマ族、モン族など様々な民族の学生が在籍するようになっていった。さらに、ミャンマー国内のカリキュラムに加え、少数民族言語や歴史教育など国内では一般的でない授業も提供されていること、対立する民族の子どもたちが共に学び、互いの文化や言語を学び合う機会となっていることなどが述べられた。

質疑応答では、「継続的に正しい情報を得ることが大切だと考えているが、情報に溢れた現代社会で正しい情報を見定めるにはどうしたらよいか」、「学生である自分にできる支援はどのようなものか」といった質問が寄せられた。

最後のコメントとして、小武氏から、支援は与えるだけではなく同時にこちらも得るものでもあること、また若い時期に難民キャンプで出会いを経験することは大変貴重な体験であるということが語られた。松本氏からは、支援を継続すること、若い世代に関心を持ってもらうことの重要性が述べられた。